

ギリシア語に翻訳された日本文学(1) — 永井荷風作「雨瀟瀟」 —

高橋 り え こ

アテネ市内のイボクラトゥス通りやソロノス通りには、一般書から専門書まで幅広く扱う大書店から古本屋に至るまで様々な規模の書店が軒をつらねている。折りに触れ立ち寄るうちに、ふと気付いたことがある。それは、外国文学の書架を設けている書店ですら、日本文学の翻訳や解説書にお目にかかる機会が極めて稀であるということである。注意して調査した訳ではないため、正確な翻訳出版状況を網羅することはできないが、1980年以降出版された日本文学及び文学研究書は、未だ十数冊に留まっているように思われる。筆者が収集し得た数冊をここに簡単に紹介してみたい。

先ず日本古典文学に関して列挙する。カスタニオーティー社よりソクラテイス・L・スカルチス監修の「諸民族の図書」というシリーズに、(ギリシアも含めた各国の古典文学がギリシャ語に訳され二十冊ほど出版されているのだが)「禅」「俳句と川柳」「清少納言一枕草子」「古事記」の四冊⁽¹⁾が収められている。これらはそのいずれも英語、或いはフランス語からの重訳との註がある。このシリーズとは別に同社からアンドレアス・アングラキス訳「中国と日本の詩⁽²⁾」が出ている。「万葉集」「伊勢物語」「古今集」及び「新古今集」からの詞華集で、漢詩の翻訳に加え各歌集の歴史的な説明が極く簡単に添えられている。

数少ない翻訳化された日本文学の中で、意外にギリシアの読書界で広く読まれているのが俳句である。上述の「俳句と川柳」以外にプロスペロス社からルンビー・セオファノプルー訳、解説の「日本の俳句、132選⁽³⁾」と、クレリー・B・バババウル著「日本芸術に於ける俳句と俳画一芭蕉と『野ざらし紀行』—⁽⁴⁾」が出されている。尚、後者のバババウルは、ギリシアの俳句研究の第一人者で、雑誌《NEA EETIA》に日本古典文学に関する稿を寄せている他⁽⁵⁾、ドナルド・キーンの "Japanese Literature - An Introduction for Western Readers" をギリシア語に訳している⁽⁶⁾。

近世から現代に至る散文の翻訳も数少ないのだが⁽⁷⁾、最近の出版に森鷗

外の「ウィタ・セクスアリス」がある。フランス語からの重訳で、訳者レナ・ミリリにより著者と時代背景についての説明が付せられている⁽⁶⁾。また、自身も作家として活躍しているアレクサンドロス・コジアスがケドロス社から近松門左衛門の「国性爺合戦」を出している⁽⁹⁾。

こうした翻訳状況の中で、特筆に値すると思われる小冊子が出版された。これは1990年5月、アレクサンドリア社から出された永井荷風の「雨瀟瀟」である⁽¹⁰⁾。《TO BHMA》紙は、新刊翻訳書紹介の頁の冒頭で次のように書いている⁽¹¹⁾。

日本は、産業と強い経済力だけでなく、特に優れた文学の伝統も持ち合わせているのだが、後者については知られていない。初めて日本語から直ちにギリシア語に訳されたこの作品は、日本の伝統に触れ得る好機とまさに言えよう。この「偉業」をうちたてたのは、パナイヨーティス・エヴァンゲリーデイスで、日本で広く読まれている作家、永井荷風の作品を翻訳、序文も書いている。その作品は《Στρανή Βροχή》という題で、登場人物と情調とは静観しつつ憂うつに歳月を逍遙している。1920年代に書かれた荷風の卓越した作品と見なされている。

また、現在《ΚΑΘΗΜΕΡΙΝΗ》紙の文芸欄で活躍しているパンデリス・ブラスも、《Η ΠΡΩΤΗ》紙で、初の日本語からの翻訳である《Στρανή Βροχή》が一つの画期をなした点を強調している。更に永井荷風の略歴を説明し、その作風を「雨瀟瀟」に例を取り、次のように評している⁽¹²⁾。

1920年代に書かれた「雨瀟瀟」は、あたかも黙想の数珠のようなものである。回想が一粒一粒、その憂愁を物語る。しばしば横暴になり、やっきに説得しようと豪語ばかりしてしまう。そのような類の愚痴に終らないよう現実と感傷から一歩離れて、著者は回想している。この作品は、悲哀の持つ「静かな力」と、通俗を厭い性急な悲劇仕立てを避けることを特に教えている。

さて、《Στρανή Βροχή》第一版出版の約一年後、1991年6月、訳者エヴァンゲリーデイスは、文学翻訳者ギリシア協会⁽¹³⁾から文化大臣賞を受賞している。当協会の選考委員の一人、アテネ大学現代文献学教授カリオフィリス・ミツァーキスによれば、初の日本語からの翻訳であることに加え、江戸情趣と近世日本文化への懐古の情が色濃く表現されている作品であるという点が主な授賞の理由であった。欧米文学に比べて、どうしても英語やフランス語などの外国語を介してしか為されてこなかった日本文学の翻訳に新たな可能性を与えたことが高く評価されたと同時に、漢詩に浄瑠璃の面八、三味線に芸者といった東洋趣味的な作品の情調が、ギリシアの読書家を魅了した

であろうことは容易に理解されよう。また訳者自身が《 Η ΕΠΟΧΗ 》紙のインタビュー記事⁽¹⁾の中で、明治の西欧化に急進する時勢を批判し近世の文芸に回帰していった荷風の文筆家としての姿勢に深く共鳴したと語っているように、先代の文芸を復興しようとする気運の見られるギリシア文学界に共感をもって荷風が迎えられたとも言えるだろう。

最後に訳者エヴァンゲリーディスの経歴をかいつまんでここに紹介しておく。

1955年アテネに生まれる。少年期の数年をスペインで送っている。1960年代以降、ギリシアで広く知られるようになった芭蕉の俳句⁽¹⁵⁾を翻訳で読んだのが、日本を知るきっかけとなる。1968年にノーベル文学賞受賞後、英語からの重訳による川端康成の「雪国」が新聞に連載されたことで、ますます日本文学に傾倒していった。アテネ大学で法学を学んだが、卒業後は雑誌を中心とした文筆活動に入る。1984年から約四年間に亘り日本に滞在している。英語、スペイン語を教える傍ら独習で日本語を学ぶ。日本古典芸能、特に歌舞伎と文楽に触れ、次第にこれらの伝統美を賛美する永井荷風、谷崎潤一郎等の耽美的情調に魅せられていく。

来日以前、1983年にスペイン語からの翻訳を出版しているが、実際翻訳者としての地位を得たのは《 Σειράν ή Βροχή 》の出版以降と見てよいだろう。これに引き続き谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」が1992年4月にアグラ社から出版される予定である他、現在は同じ谷崎の「春琴抄」を手掛けているとのことである。日本文学研究の分野では欧米諸国の中で大きく立ち遅れているギリシアに於て、先駆者としてのエヴァンゲリーディスの翻訳活動に期待したいと思う。

註

(1) Σειρά: Τα Κείμενα των Λαών

Διεύθυνση Σειράς: Σωκράτης Α. Σκαρτσής

4. 《 Ζεν 》 (1988)

7. 《 Χαϊκού και Σενριου 》 (1988)

10. 《 Σέϊ Σόναγγον 》 (1988)

11. 《 Κότζικι 》 (1989)

Εκδόσεις: Καστανιώτη

(2) Ανδρέας Αγγελάκης: 《 Κινέζικη και Ιαπωνική Ποίηση 》

(ε 1983) Εκδ. Καστανιώτη

(3) Ρούμπη Θεοφανοπούλου: 《 132 Γιαπωνέζικα Χαϊκού 》

- (1986) Εκδ. Προσπέρους
- (4) Κλαίρη Β. Παπαπούλου: « Ποίηση και Ζωγραφική στην Ιαπωνική Τέχνη - Ο Μπασο και "Ανεμοδαρμένο Ταξίδι" » (1988) Εκδ. Προσπέρους
- (5) « Πλευρές της κλασσιικής ιαπωνικής φιλολογίας » Νέα Εστία 1221 (Μάϊος 1978) σ. 648-657
« Εισαγωγή στην παραδοσιακή ιαπωνική λογοτεχνία » Νέα Εστία 1456(Μάρτιος 1988) σ. 291-305
- (6) Donald Keene: « Ιαπωνική Λογοτεχνία, εισαγωγή για αναγνώστες από τη Δύση » Μετάφραση: Κλαίρη Παπαπούλου, (1987) Εκδ. Καρδαμίτσα
- (7) 現代文学に関しては遠藤周作、松本清張等の名が挙げられるが詳細については次の機会に譲りたい。
- (8) Μορί Όγκαϊ: « VITA SEXUALIS ή Η ερωτική μαθητεία του καθηγητή Κανάι Σιζούκα » Μετάφραση: Λένα Μιλιλή (1991) Εκδ. Ηρόδοτος
- (9) Τσικαμάτσου Μονζαεμόν: « Οι μάχες του Κόξιγυα » Μετάφραση: Αλέξανδρος Κοτζιάς (1984) Εκδ. Κέδρος
- (10) Ναγάϊ Καφού: « Σιγανή Βροχή » Εισαγωγή, σχόλια, μετάφραση από τα ιαπωνικά: Παναγιώτης Ευαγγελίδης (1990, 1991) Εκδ. Αλεξάνδρεια
- (11) « Αριστουργήματα από τον κόσμο » Το ΒΗΜΑ (1.7.1990)
- (12) Παντέλης Μπουκάλας: « Η Σιγανή Γραφή του Ναγάϊ Καφού » Η ΠΡΩΤΗ (15.9.1990)
- (13) Ελληνική Εταιρία Μεταφραστών Λογοτεχνίας
- (14) Κώστας Νταντινάκης: « Νοσταλγός της παράδοσης- Για τη μετάφραση της " Σιγανής Βροχής " » Η ΕΠΟΧΗ (18.11.1990)
- (15) ギリシアに於ける俳句の受容に関しては次の論文を参照されたい。
Γ.Π. Σαββίδης: « Τάνκα και Χαϊκού ή τα Νυχτογιασεμιά » « Πάνω Νερά » (1973) Εκδ. Ερμής σ. 69-76